

# みなとMIO MACH けんちくさんぽ vol.1

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部  
兵庫地域会 地域まちづくり委員会

## みなと元町の「シンボル」をめぐって

前回まで1年間にわたり、私たち日本建築家協会(JIA)兵庫地域会のメンバーで、「乙仲境界デザインワークショップ・乙仲さんぽ」の活動紹介とコラムを連載させてきました。今回からは、対象エリアを「みなと元町とその周辺」に広げて、建築設計を専門とする私たちの視点で、この地域の空間的な魅力や可能性について、記事を連載させていただきますことになりました。引き続きどうぞよろしくをお願いします。

第1回は、みなと元町の「シンボル」をめぐって、日頃考えていることを、私見ではありますが、書かせていただきたいと思えます。

シンボルは街を象徴し、その魅力を高めてくれる大きな存在です。さて、みなと元町のシンボルというと、どのようなものでしょうか？

このエリア内でも通りごと、町丁ごとに異なる特徴がありますので、それぞれの大切なシンボルがあるかと思いますが、地域住民でない私にもすぐ思い浮かぶシンボルとしては、街から間近に見える「ポートタワー」や元町通商店街の「スズラン灯」があります。

また私は近年知ったことですが、戦後まも

なく、元町通3丁目商店街が「ジュラ街」と呼ばれる斬新な建築デザインで、いち早く復興を遂げたことから、「ジュラルミン」もかつてこの街のシンボルであったと思います。今ではもう、痕跡も残っていないようですが。

歴史的にはもう一つ、ちょうど1964年の神戸ポートタワーの竣工直前に入れ替わるように姿を消した川崎造船所の巨大な「ガントリークレーン」は、それまで街のどこからでも見え、港の産業を支えた、かつての街のシンボルであったことも知りました。

ここで私があげたシンボルたちは、大きさは様々ですが、ある共通点があることに気づきました。それはいずれも金属でできていること、そして作られた時代の最先端に行く優れた造形性があることです。

時代が古い順から改めて見てみると「ガントリークレーン」が建造されたのは、大正元年(1912)。実用目的の港湾設備で、現在はキリン型ですが、当時の写真を見ると、巨大な鉄骨フレームは、やはり時代の先端を感じさせる造形性を誇っていたと思われます。

次に元町通に「スズラン灯」が最初に設置

されたのは、大正15年(1926)。スズランの花の部分はガラスグローブですが、ブラケット部分は、エレガントな曲線を持つアール・デコスタイルでデザインされました。戦時中の供出を経て、その後、丁目ごとに特徴のある金属造形として復活。現在に受け継がれています。

そして戦後の「ジュラ街」の建築群。突き出し看板部分にジュラルミンが使われていたようで、当時の写真からは簡明なモダニズムの構成美とジュラルミンならではの特別な光沢感、そして新時代を開く復興のシンボルとしての明るさが感じられます。

1964年に竣工した「神戸ポートタワー」は、優れた発想と高度な技術で、一葉双曲線と呼ばれる鼓型の造形美を実現。「鉄塔の美女」として広く知られ、人々に愛されてきました。そして現在も、ポートタワーは、海洋博物館のスペースフレームやモザイクの観覧車と合わせて、神戸のシンボルとして、輝き続けています。

このように、各時代の高度な技術と美意識が追求された「金属の造形美」。それがみなと元町を象徴するシンボルとして、それを輝かせる光と相まって、街を彩り、そこに神戸・みなと元町ならではの先進性とエレガンスのスピリットが宿ってきたのではないのでしょうか。



川崎造船所のガントリークレーン(大正期)



元町商店街のスズラン灯(昭和初年)



神戸ポートタワーと海洋博物館

## シンボルのデザイン活用について

シンボルはそれ自体の存在が街の魅力を高めるのはもちろんのこと、それをモチーフとして様々なデザインに活用することで、さらに街の魅力アップにつながれると思います。

ポートタワーについて考えると、モチーフにしたイラストやグッズをところどころで見かけますが、プロポーシオンをかなり歪めて描かれていたり、極端に省略されたりしていて、せっかくの造形美をうまく表現していないものが多いことが、私は以前から気になっていました。

それはポートタワーの鼓型の構成や接合部分が、一見複雑に見えることから、形を正確に捉えるのが、なかなか難しいからだと思えます。

しかし設計者が考えた造形原理や基本寸法をきちんと学ぶと、あの美しい曲線が、とてもシンプルな直線からできていて、再現も難しくないのでわかります。私自身、その優れた造形原理

を知り、より強く魅せられました。そして、ポートタワーの形をある程度抽象化しながら再現すれば、造形美を生かして、様々なデザインに応用できるのではないかと、考えるようになりました。

小さなスケールで抽象化するなら、金属加工自体も、複雑で高度な加工をしなくても、板状のものを曲げたりレーザーカットするなど、比較的シンプルな加工により、再現できると思えます。

現在はCADで3Dモデルを作って検討し、デジタルデータから加工も正確に行えますので、このような方法で、例えばポートタワーをモチーフにした照明を作り、いろんな場所に設置してみるのもいいのではないかと思います。

また金属に限らず、様々な材料や工法でデザインすれば、多くの用途に活用できる可能性が広がると考えています。例えばガラスやプラスチック、木や竹などもです。サイズ的にも、大小

様々なものが考えられ、雑貨や家具、パッケージなどにデザインを活用できるかと思えます。

ちょうど、神戸ポートタワーは2023年に60周年を迎えるにあたり、今秋から2年間の休館を経て、リニューアルオープンすることのこと。

そこで今、神戸松蔭の学生たちとこのようにポートタワーをモチーフに、様々なデザインを考え、活用する提案プロジェクトに取り組み始めています。ポートタワー型の大小の照明や様々なグッズのデザインが、小さなシンボルとして街を彩り、リニューアルの期待感を高め、街を活気づけることをイメージしながら、取り組んでいますので、ご賛同いただければ幸いです。



米原 慶子 (よねはら けいこ)

神戸松蔭女子学院大学 人間科学部  
ファッション・ハウジングデザイン学科  
准教授/Ks Architects 夙川アトリエ  
主宰/住宅・建築・インテリアなど、空間デザインを専門として教育に携わる